

2007年3月3日

## 【美術館と社会 - 美術館の位置する社会を描く】

### 【概要】

今美術館に関わる全ての人びとが抱いている漠然とした疑問、「今美術館はいい方向に向かっているの？それとも悪い方向に向かっているの？」。この問いには誰が答えるのでしょうか？90年代の後半には、美術史家や美術批評家を中心に今後の美術館像について多くの言説が生産されました。2000年代、国立博物館・美術館群の独立行政法人化、そしてこの数年常に議論的となった指定管理者制度の地方博物館・美術館への導入は文化政策の視点から多くの議論がなされてきました。

それでも残る上手く美術館の現状をとらえきれていないのではという不安、それはどこから来るのでしょうか。例えば、独立行政法人化に際し、日本の美術の制度論史に詳しい北澤憲昭はこう語っています。「僕ら自身の責任でもあるが、近代の産物である美術館・博物館の存在自体を根底から問うことがなかった。」<sup>1</sup>と。つまり、従来の議論で決定的に欠けていたのは、社会的な側面から美術館を語るという視点の欠如です。もちろん、美術館が美術という社会空間における制度上の象徴である以上、芸術運動の潮流との関係性のなかで、また広く国家の文化政策の観点から議論されることは必要です。けれども、例えば独立行政法人化から指定管理者制度へと至る美術館の制度変更の過程の背後にある福祉社会から自由主義社会への動きは、実は富の再分配を重視した社会から富の獲得のための機会の平等を重視する社会への移行です。そこで問われているのは、美術館、ひいては美術を社会における「公共財」と見なす視点から、市民の余暇の対象の一つとして美術館を見なす視点への移行であり、これはある意味では、もはや美術に関わる社会だけでは対処できない問題だとも言えます。

そこで、当分科会では「美術館と社会」との関係性を、対象を戦後の日本の美術館に絞り、その社会的側面に重心を置いて議論することでこの従来の視点の欠如を補うことになればと考えています。前半では、「美術館と社会」の関係性を議論する上での基盤を共有することを目指します。まず、「美術館と社会」を議論する上での枠組みに触れたうえで、戦後の美術館史を社会との関係性の上で議論します。現在に至る美術館の歴史を踏まえた上で、後半のパネルディスカッションでは現状において「美術館と社会」を考えていく上での、幾つかのキーポイントを会場の皆さんとともに考えていければと思います。今日この場に参加する皆さんが美術館と社会の関係性をそれぞれ考えていくためのきっかけを提供することになれば幸いです。

光岡寿郎：東京大学大学院， ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ  
e-mail : blueprint\_0929@yahoo.co.jp

---

<sup>1</sup>朝日新聞 2001年3月21日夕刊

### 【タイムテーブル】

時間	内容	担当
14:00 - 14:10	ご挨拶・パネリストの紹介	光岡寿郎
14:10 - 14:20	導入：「美術館と社会」を見渡すパースペクティブ	光岡寿郎
14:20 - 14:40	戦後の日本の美術館を振り返る Part :戦後から高度経済成長期まで(1940～1970年代) Part :消費社会と美術館 (1980～1990年代)	稲庭彩和子 住友文彦
14:40 - 14:50	現代社会における美術館の可能態？	藤高晃右 光岡寿郎
14:50 - 15:30	パネルディスカッション	パネリスト全員

### 【パネリスト】

住友文彦 : 東京都現代美術館 / NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ。

稲庭彩和子 : 神奈川県立近代美術館

藤高晃右 : NPO 法人 GADAGO 理事 ( Tokyo Art Beat )

光岡寿郎 : 東京大学大学院博士課程 / ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ

天野太郎 : 横浜美術館